

人間は古くから通過儀礼や儀式において痛みを伴った行動を率先してとることが知られている。部族での痛みを伴う儀式は、所属部族に対する帰属意識を高め、互いの協力行動を促進するということが人類学の研究において証明されている。しかしこれらの研究は生存のために他者と密接な人間関係を築く必要がある部族にしか焦点を当てていない上に、儀式の後でしか調査を行っていないため本当にその心情が儀式に参加したことによるものなのか明確に検証されていない。また、人々が惰性的に行っているような儀式では参加者は儀式の存在自体を主体的に意識していないがゆえに、儀式に参加することで参加者の所属集団への意識が変わることは難しく、痛みを伴う儀式の直接的な効果は検証できない。本研究では以上の点を改善し、北海道大学恵迪寮の新入寮生を対象に調査を行った。毎年4月に行われる過酷な歓迎行事に1か月間新入寮生に参加してもらい、その前後で同じ心理尺度を含む質問紙に回答してもらった。二回の調査結果を比較し、歓迎行事に参加することで恵迪寮という所属集団への意識がどのように変化するかを検討した。結果として、歓迎行事においてより強い苦痛を感じていた人ほど恵迪寮の先輩に対して強い統合を示し、行事に参加した後その傾向が強まることが分かった。また、恵迪寮及び恵迪寮生に対する印象に関しても、強い苦痛を感じた人ほど儀式参加後により好意的な見方にシフトしており、恵迪寮への自己犠牲意図の程度も大きく上昇していたことが分かった。さらに、苦痛の程度が大きいほど強く先輩や同輩に親愛感情を感じていることも示された。しかし、より強く苦痛を感じた人ほど同じ痛みを共有した同輩より痛みを与える側の先輩のほうに強く親愛感情や統合を感じていることが分かった。以上のように、互いに面識のない人々が共に苦痛を伴う儀式に参加することによって互いの結束力や集団への意識が強まるということが示された。同輩よりも先輩に対してその傾向が強くなった点に関しては、恵迪寮という環境の特性が理由として考えられる。生活に順応するまで新入寮生は先輩に従わざるを得ないため自ずと先輩を強く意識し、回答時に特定の人物を連想した可能性がある。今後このようなフィールド調査を行う際には、行事や儀式以外の要素があまり入り込まないようなものを対象にするのがより適切であるといえるだろう。